

文学部 比較文化学科 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は9時30分から11時00分まで(90分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで設問に答えなさい。

「日本人論」と呼べるような本はこれまでにどのくらい出ているのだろう。ことに第二次世界大戦以後は、数え切れないほど出版されている。そして、その中のかかなりの数はその時々ベストセラーとなっており、さらにいく点かは、数十年の長きにわたる、ロングセラーとなっている。これほど常に人気のあるテーマは他にあまりない。

では、なぜこれほどまでに多くの日本人論が書かれ、読まれるのだろうか。ヒントは、「日本（人）について考える」とはどういうことか、それはどういう状況で、何のためにするのか、というところにある。

日本について考えるとは、日本とそれ以外の違いについて考えることである。その違いを感じなければ、つまり、私たちを取り巻く日本の、その外側に世界があることに気づかなければ、日本は私たちにとって最大の世界ということになる。そうなれば、その「日本」を比較するものは何もなく、日本をどうこうと考えることはない。考えるのはその内側のことだけになる。日本について考えるとは、その外側に関心が向いて初めて起こることなのだ。

言い換えれば、日本人論という本の中身が、すべて日本人について書かれていても、それは表面に現れないところで日本以外の国や日本人以外の人と比べながら書かれている、ということだ。日本人は清潔好きである、と、書いてあるときは、日本人以外はあまり清潔好きではない、と暗に示唆しているのである。内容の中の隠し味としての比較ではなく、その比較をすることが内容の眼目なのだ。

そうした自分の国を対象としてとらえる意識はしばしば、対外的危機の中に芽生える。そのとき外国との比較はたんなる知的関心ではなく、危機への対処として行われる。私はこうした危機によって生まれた日本意識、それが国家モデルを構想する段階にまで至ったのは、16世紀以降ではないかと考えている。

この、日本では戦国時代と呼ばれる時期から17世紀の初めにかけて、日本が対外的に自らを構想する、という事態が起きたことには理由が大きく三つある。まず第一に、中国の帝国システムからの日本の相対的な独立性が高まったこと。それは東アジアが、のちに明の滅亡（1644年）に見られる混乱の時期に入ろうとしていたことによる。第二に、ポルトガル人とそのヨーロッパ文明の来訪によって、「唐天竺^{からてんじく}（注1）」より

広い世界にじかに接触したこと。また同じ時期に、北辺にのちに清を築く騎馬民族の影響を感じ取っていた。第三に、公家と武士の二重政権の状態が、武士による権力確立によって、新たな国家体制を取ろうとしていたこと、である。そうした状況を背景に、私は織田信長と豊臣秀吉と徳川家康がその後現在にまで続く日本のモデルを提出した、と考える。

信長の日本は、キリスト教に寛容であり、西洋の文物に関心を持ち、南蛮貿易に自ら積極的にたずさわろうとした。また外から入ってくるだけでなく、1582年の4人の少年による天正遣欧使節、シャム（タイ）に渡った山田長政、のちにスペイン・ローマに渡った伊達政宗による慶長遣欧使節の^{はせくら}支倉常長などのように、日本人の方から外国に出て行った歴史的事実も、信長の考えた日本のあり方、モデルによって可能となったものである。私はこのモデルを「国際日本」と呼ぶ。しかし、このモデルの問題の一つは、西洋があまりに「遠い」という単純な距離の事実にあったと思われる。信長の統一半ばの死によってだけではなく、この東と西の隔たりは、信長の構想した国際日本のモデルを安定したかたちでは成立させなかったに違いない。そして、そのことは未だに日本の持つ条件として働いている。

これに対して、秀吉の日本は「大日本」と呼べるものだ。秀吉は、信長のあとを引き継ぎ、キリスト教が西洋からの政治勢力として持つ潜在的な力をそぐために宣教師の追放を行った。しかし、キリスト教の布教の手段にもなっていた南蛮貿易は自らの管理下に独占しようとした。また、東南アジアには、朱印船貿易（秀吉ではなく家康が始めたという説が強くなっているが）などで影響力を伸張する。しかし、彼の東アジア政策で最も有名なのは、朝鮮半島への出兵策である。そこには晩年の秀吉が持った誇大妄想癖からの影響が否みがたいが、それは全く無根拠の思いつきであったのではない。そこには、16世紀後半の明が、北方からのモンゴル人と南方の^{わごう}倭寇やポルトガルなどの勢力から絶えず脅かされる不安定な存在となっていた事実がある。そして、北方からの北海道への影響を分断する、という地政学的な^(註2)判断に基づいていたことが知られている。実際に、秀吉が成功しなかった明の打倒は、のちに清となる勢力によってその数十年後に果たされたのであった。さらにのちになって、中国人と日本人の女とのあいだに生まれた^{ていせいこう}鄭成功が、中国、日本、台湾を横断しながら反・清の運動を繰り広げたのは、秀吉の^{ほん}汎東アジア的な構想^(註3)に地政学的な現実性のあった証

左と言えらるう。

秀吉ののちの家康が創始し、確立し、それから現在に至るまで日本のモデルとして未だに社会の各レベルに^レ込みわたっているのが「小日本」である。徳川の幕藩体制とは、家康の出身地の小さな地域を治めるシステムを全国に及ぼしたものだと言われているが、非常に「内向きな」、細かい単位にまで支配の網の目が張り巡らされた緻密なものであった。しかし、家康は当初から「小日本」モデルを取っていたのではなく、朱印船貿易を奨励するなどして、東南アジア各地に日本人町ができるような「大日本」の方向へのお膳立てをしていたのであった。キリスト教には不寛容でありながら、貿易などを通じて、そうした「外に向かう」「大日本」的なモデルに沿う施策をしいた家康が、海外往来の禁止、のちにいわゆる鎖国と呼ばれる施策に転換するのは、日本内外のキリスト教勢力、及びその背後にあると考えられた西洋からの政治的力に、そのまま国を開いてはよく対抗し得ない、と判断を下した結果であった。その家康の死ののちに完成した「鎖国」は対外的な外交政策であったが、それがその内に招来したのは、外からの疫病の襲来も少なく、^{まきん}飢饉も小規模で、戦争は全く見られない、人口論的には奇跡とも思える驚くべき、循環型の、持続可能な社会であった。

(1) これらの三つのモデルが生まれたのは、対外的に独立した国としてのモデルを取る必要が生まれたことと、そうした国家としての力量が備わったことの二つによる。それまでは大陸の東の辺境にある島国として、外からの力を受けることが相対的に少ない位置にあったが、16世紀になって、大航海時代に始まる地球の一元化の波がやっと到達したのだ。それはまた、東アジアが大明帝国の衰退によって次第に不安定になる時期とも重なっていた。その事態に直面して、短い期間に矢継ぎ早に生まれた前述の三つのモデルは、当時の日本の条件から考えられうる国家体制として、「日本」についての三つの可能性を試したものと言えよう。それぞれは互いに重なり合っている。しかし、はっきりと異なる三つの焦点を持つ。

この日本モデルはじつはその後の明治以後の日本にも三つの流れとしてみられる。近代に入ると日本が国家としてのモデルを取ろうとするとき、この三つのモデルは常に存在し、中期的にはその時期の状況に合わせてこのどれかに焦点を結ばざるを得ない。しかし、いずれもそれぞれの欠点を持っていて、長期的には一つのモデルだけが続くことはなく現在に至っている、と。そして、そのモデルが変換されるごとに、ま

た、そのモデルの実現が達成されたと感じられるときに、またその体制が劣化しつつあると感じられるときに、日本人論は書かれるのである。

私はここで一つの仮説を提出する。(2)「日本人論」とは、近代の中に生きる日本人のアイデンティティの不安を、日本人とは何かを説明することで取り除こうとする性格を持つ。不安を持つのは、日本が近代の中で、特殊な歴史的存在であること、すなわち、「近代」を生み出した西洋の地域的歴史に属さない社会であった、ということに由来する。その、日本がいわゆる「西洋」近代に対して外部のものであることは歴史的な規定であり、時間をさかのぼっては変えることはできないから、不安は、繰り返してやってくる。よって、「不安」が高まるときには、その不安の個別性に添って説明する「日本人論」が書かれる。しかし、このアイデンティティの不安は根元的で、解消されないものだから、常に新たな「不安」が生まれ、そのつど新たな「日本人論」がベストセラーとなる。なお、この「不安」とは、決して、「日本」が危機となったときにだけ増大するのではなく、国運が好調のときもまた、その「成功」に確信が持てないため「不安」が生まれる。それゆえ、国力が低まったときも高まったときも、不安とそれに対する日本人論が現れることになる。

(船曳建夫『「日本人論」再考』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

(注1) 中国とインドのこと。

(注2) 地政学：ある国家や民族が置かれている政治的状况を、主に地理的な要素・条件から分析し、さらには今後とるべき道、政治戦略をも導き出そうとする学問。

(注3) 日本主導で東アジアの諸民族・諸国家を統合し、西洋諸国に匹敵しうる一つの政治共同体を打ち立てようとする構想のこと。「汎」は、「広くそのすべてにゆきわたる」という意味。

問1 下線部(1)の「これらの三つのモデル」について、それぞれの特徴や違いが明確になるように350字以内でまとめなさい。(100点)

問2 下線部(2)の仮説をふまえ、われわれが普段よく耳にする、日本人の特徴を具体的に挙げ、そのように言われる背景についてのあなたの考えを400字以内で述べなさい。(100点)

文

学部

比較文化

学科

科目名(小論文)

問題文 2頁, 下から5行目: (誤) 判断に基づいて
(正) 判断にも基づいて

3頁, 10行目 : (誤) 施策
(正) 政策